

## 月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-12

来訪の目的を真紀から聞かされていた麻里子は、亡くなった兄と年恰好は同じ位に見える名うての酒造メーカーの社長を目の前にして緊張を隠せないでいたが、ありのままを押し通す覚悟はできていた。

麻里子は部下に勧められてリンゴを食べているがっしりした体型の中年紳士から、細身に神経質だった兄とは対照的に大企業のトップならではのカリスマ性を感じていた。

名前も知らない同業他社に、決まっていた予定を後回しにしてまで往訪する意義へのわかまりを引きずっていた辰巳は、麻里子と出会ったことで霧消させていた。

W酒造は、連休で多少の活況を呈していたが、それでもどこかで経営破綻しそうな前兆や予兆は隠しきれないはずなのに、女杜氏の所為か、そういった痕跡は微塵もなかった。

この1年の間、いつ不渡りを起こしてもおかしくない時限爆弾を麻里子は抱えながら過ごしてきた。

そのプレッシャーに手を尽くして耐えてこられたのも、真紀の機転で雲の上の人が下りてきて、暗雲を吹き飛ばしてくれることを信じて疑わなかったからだ。

こうして、実際にH酒造の社長と同じ時間を共有していると、真紀から聞いていた解決案が現実味を帯びてくるのを、麻里子の皮膚感覚はとらえていた。

辰巳がタイトなスケジュールを押しつけて来ているのを真紀から知らされていたので、この場は自分がイニシアチブを取った方が賢明かどうかを麻里子が逡巡していると、「申し訳ないが、すぐに済むので席を外してくれませんか」と辰巳が唐突に言うので、「わかりました。売店におりますので、お声掛けください」と麻里子はすかさず応答して、応接室を退出した。

数分後にJ課長が売店に顔を出した。

「私はこれで東京へ戻ります。社長はゆっくりなさるそうですので、あとはよろしく願いいたします」とJ課長は慌しさを自然の成り行きのような口ぶりで言った。

駐車場で労いの言葉を伝えてJ課長を見送った麻里子は、余計な詮索などしても意味がないと心に決めて、応接室に向かった。

「ホテルの予約をしたいのだが、良い所があったら紹介してもらえませんか。連休で難しいかな？」と辰巳は努めて穏やかな口調で尋ねた。

「ここから車で10分ほど行った所に無理が利くホテルがありますので、予約を入れておきます」と麻里子は何の疑いもなく眼で微笑して言った。

その時どうしてか、麻里子の眼の底にある網膜の上に青い月と白い月が二つ浮かんでいた。